五月総評

立花　開

泣くことを我慢して我慢して
きみは
素数みたいに寂しく笑う　　まちりこ　　埼玉県

「素数みたい」は誰の心にも入ってくる比喩ではない。けれど、泣くことさえも我慢し続けて笑うしかない孤独と、「素数」の拠り所のなさと感情を見失った無機質さが響き合う。繰り返された「我慢」は二度ではないだろうが、その間に「きみ」の心は少しずつ数字のようになってしまった。

むーみんのように
陽なたのあぜみちを
ぽちてぽちてと駆けるおとうと　さいう　石川県

幸せの姿の描写。色々なものが詰め込まれているけれど、バランスがよく読みやすい。やはり「ぽちてぽちてと駆ける」のオノマトペの独創性がとてもよい。弾みをつけているけれど重たくて、まだ幼く体も小さいのだというのが伝わってくる不思議な音感である。

気がつけば手元に
ジョーカー夏の月
小林紅石　　埼玉県

ジョーカーの存在は、ゲームによって最も強力になるときもあれば負けの象徴となる場合もある。この場合はどちらなのか。何のゲームかわからないまま始まってるのが人生だし、ゲームの内容を知った時に持っているカードで勝負するしかないのだ。

手ではなく指をつないで階段を、
月の死角で生きるふたりは　　あお　　奈良県

手と手が繋げるというのは、両者が想い合っているか、そうあることが許された関係のみであると私は思う。指だけで繋ぐ途切れそうな関係と、月の仄かな光にさえ照らされない場所を選んで生きる「ふたり」の危うさ。

未来へと向かう
からだは便箋ね
どうか、
やさしく記されていて　　こはくいろ　大阪府

言葉や記録を運び届ける便箋。からだが運ぶものはどのような内容だろうか。触れあった記憶、雨に濡れた冷たさ、美味しいものを食べた時の舌の感触。自身にしか分からない、見えない言語を刻み、そして刻まれながら私たちは未来に向かって生きている。

盗まれていいものだけしか
持ってないわたしが
砂浜に着きました　　香取小春　宮崎県

すなわち何も持っていない感覚でいる、ということ。持たないままで歩くことのなんと寂しく自由なことだろう。歩みを進めるほどに砂浜に足跡は遺るけれど、自分はどこにも遺らない。それを知っているのも自分だけ。

遠回りしたい君の手の上で
ずっとずっと踊っていたい　　いまはじまるの　兵庫県

辿りつきたくない答えがある。だから、ずっと遠回りして見ないふりをして、楽なところだけを通っていたい。答えなんて欲しくない。けれどその場所にいる限り、どんなにあがいてもいずれ答えには辿りついてしまう。

チョコレートがない父が帰らない　　小里京子　北海道

父親が帰宅しない本当の理由はチョコレートなどではない。そんなことは知っているけれど、自分の中で理由がないと立っていられないものがある。だから、家からすべてのチョコレートを消し去り、父が来ない理由を作り続ける。悲しい作業である。

私ではありません
私でもありません
ただ逃げたいだけが
重すぎる

全美　神奈川県

「私」とは誰なのか、考える。私が見る「私」、あなたが見る「私」、私からは顔の見えない誰かから見える「私」。けれど、どの「私」も違う、本当の「私」に該当するのは自分でさえ分からない。けれど、逃げたい、今から逃れたい。ただそれだけ。

まっしろいロールケーキに
倒れこむときだけみえる
教会がある

折原　神奈川県

疲れ果てた時の甘いものは沁みる。あのときの心の状態は、ロールケーキへの依存の仕方は、たしかに倒れこむときのそれと似ている。本当に心から求めた時にだけ見える聖域。そこには各々が見えるものが違っていて、主体には教会だったのだろう。白い清浄な教会。